

運動不振学生の運動に対する態度に関する調査

古田 久 (教育学部・准教授)

I. 目的

運動技能の指導場面では、他者と同じように練習を行っても、なかなか運動技能の向上が認められない学習者が見受けられる。このような学習者は、「運動不振」もしくは「運動遅滞」と呼ばれる。両者に厳密な区別はされていないが、基礎的な運動能力や運動学習能力をもっていないながら、能力に見合った学習成果があがらない状態を運動不振といい、そもそも基礎的な運動能力や運動学習能力が低いために学習課題を達成できない場合を運動遅滞という(藤巻, 2002)。

現在の学校体育では、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質を育成することが重要な目的となっている。その達成のための必要条件として「運動・スポーツが好き」という態度の形成が挙げられる。様々な運動能力を持った学習者が存在する学校体育の現場では当然ながら運動が苦手な者、すなわち「運動不振」を呈する者も認められるが、彼(彼女)らにおいても「運動・スポーツが好き」という態度が形成されることが望ましい。

しかし、運動不振を呈する者は運動が嫌いであると仮説的に考えられる。その第1の理由は、運動不振を呈する者は、運動の学習において度々失敗を経験しているため無力感が形成され、運動に対して拒否的な態度が形成されると考えられるからである。第2の理由は、「運動ができない」という事実と「運動が好き」という態度は、認知的に不協和であるため、運動不振を呈する者は、この不協和を解消させるために、「運動が嫌い」という態度を形成させる可能性が高い。

現在のところ、運動不振を呈する者は運動が好きなのか嫌いなのか、また、そのような態度が形成されるきっかけは何であったか等については明らかにされていない。そこで本研究では、運動不

振と運動の好き嫌いとの関係、及び運動不振を呈する者がどのような「きっかけ」で運動嫌いになったかを調査した。

II. 方法

1. 調査の時期・方法

2010年10月に質問紙による集合調査法で調査した。

2. 調査対象

大学生448人から回答を得た。このうち、回答に不備があったものを除外し、397人(男190人、女208人)のデータを分析の対象とした。対象者の平均年齢は18.7歳であった。

3. 質問項目

1) 個人の特性に関する項目

性別、年齢、スポーツ系サークルへの所属状況、及び体育・スポーツの活動の実施状況等に関する項目を設けた。

2) 運動不振尺度

これは、大学生を対象として運動不振を判定する尺度である(古田, 2008)。運動不振尺度は、「身体操作力」と「ボール操作力」の2つの下位尺度から構成される。判定結果は4つのカテゴリーになり、身体操作力とボール操作力の両方の尺度値において8以下の場合「運動不振」、身体操作力が8以下でボール操作力が9以上の場合「身体操作不振」、ボール操作力が8以下で、身体操作力が9以上の場合「ボール操作不振」、両下位尺度がともに9以上の場合「非運動不振」と判定される。

3) 運動の好き嫌いに関する項目

運動が好きか嫌いかについて、「非常に好きである」、「どちらかといえば好きである」、「どちらでもない」、「どちらかといえば嫌いである」、「非常に嫌いである」の5件法で質問した。また、「好き

になったきっかけ」又は「嫌いになったきっかけ」を小学校時代と中学・高校時代に分けて自由記述で回答を求めた。

4. データ分析

運動の好き嫌いに関して、「非常に好きである」と「どちらかといえば好きである」を運動好き群、「非常に嫌いである」と「どちらかといえば嫌いである」を運動嫌い群として、グループ化した。このグループを独立変数、運動不振尺度の身体操作力とボール操作力を従属変数として分散分析を行った。また、運動不振か否かによって運動の好き嫌いに差があるかを Fisher の直接法を用いて分析した。

Ⅲ. 結果と考察

図 1 に、運動好き群と運動嫌い群の運動不振尺度の 2 つの下位尺度における得点を示した。分散分析の結果、身体操作力とボール操作力の両方において運動嫌い群の方が運動好き群より有意に低かった($p < .001$)。また、表 1 に運動不振の判定結果と運動の好き嫌いとのクロス集計の結果を示した。表中では、運動不振判定の身体操作不振とボール操作不振、及び運動の好き嫌いにおいて「どちらでもない」と回答した者は除いている。Fisher の直接法による分析の結果、非運動不振群に比べて運動不振群の方が運動嫌いの割合が有意に多いという結果が得られた($p < .001$)。以上の分析結果により、運動不振と運動嫌いの間に関連があることが明らかとなった。

杉原・小橋川(1988)は、運動が嫌いになったきっかけを調査し、「能力」、「恐怖」及び「汎化」の 3 つに分類しているが、本研究でも同様の結果が得られた。「能力」に関するものの例として、「スポーツは何をやってもたいていできなかつたから。(A さん, 小学校時代)」, 「のぼり棒が一人だけ登れなかつた。ボールがうまく投げられなかつた。先生は、一度だけ登り方を教えてくれたが、その後は放置されたため。(B さん, 小学校時代)」等の記述が認められた。「恐怖」に関するものとしては、「授業中に捻挫して怖くなったから。(C さん,

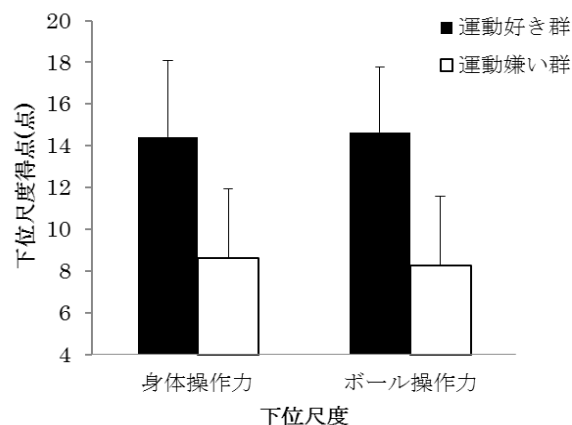


図1 運動好き群と運動嫌い群の運動不振尺度の得点

表1 運動不振判定×運動の好き嫌いのクロス表

	運動好き	運動嫌い	計
運動不振	3	14	17
非運動不振	269	10	279
計	272	24	296

中・高校時代)」という記述が認められた。「汎化」に関するものとしては、「水泳や跳び箱が苦手だったので体育が嫌いだった。(D さん, 小学校時代)」という記述が認められた。この他に、「疲れる」、「汗をかきたくない」といった生理的な嫌悪に関する記述も認められた。

運動不振学生の運動が嫌いになったきっかけに関しては、「能力」に関するものが最も多く認められた。これは、教師の適切な指導によって能力(技能)の向上を実感させることができれば、運動嫌いが減ることを示唆している。

Ⅳ. 文献

- 藤巻公裕 (2002) 運動不振児の指導. 市村操一・阪田尚彦・賀川昌明・松田泰定(編) 体育授業の心理学, 大修館書店: 東京, pp.124-130.
- 古田 久 (2008) 大学生を対象とした運動不振尺度の開発 —妥当性と信頼性の検討—. 日本体育学会第 59 回大会予稿集, 93.
- 杉原 隆・小橋川久光 (1988) スポーツに対する興味形成・変容. 末利博ほか編 スポーツの心理学, 福村出版: 東京, pp. 81-84.